

井上円了の「妖怪学」

針 生 清 人

一

二十一世紀の今日でも我々の周囲には、縁起をかつぎ、物忌みがあり、

迷信に従う者が多くいる。巫女、悪魔払い、霊界との交信を信ずる者もいる。TVや新聞にも星座占い、血液型の占いもある。それらは児童に等しいとされる限りでは大禍はないかもしれぬ。しかし相当な根拠なくそれらを受け入れる姿勢を強くするに至るとき問題は深刻となる。それらを何の根拠も理由も知らずに、またその正体も知らずに受け入れ、それを長く持つて、我々の気風となすことに問題がある。「二十一世紀」の語に代えて、「文明開化の時代」を入れて考えるとき、それが井上円了の出発点である。円了は、その意味を知らずに「不思議なこと」として受け入れるものを迷信を含めて包括的に「妖怪」と呼ぶのである。それを生み出すのは、単に不思議として無知のままに放置する探究心の欠除、批判精神の欠除であり、習慣に従っておれば安全であるとする心情である。現在の我々は、「妖怪」という語を聞くとき、嘲笑を以って受止めるだろうが、円了にとつては、それが現在にまで生き続けるその「しづとさ」が問題であると共に、

それを育ぐくむ精神風土、国民の氣質が問題である。果して日本人は文明人たり得るのか、である。円了の妖怪論は日本人を文明化するための実践論であつたのである。

さらに言えば、迷信退治を含む円了の社会啓蒙の運動は仏教改良による仏教再興のためにも必要であつたことである。仏家に生まれた円了は当初仏教教育を受けていたが、内心仏教が真理でないことを知り、「願を円にし珠を手にして世人と相對するは一身の恥辱」とすら思っており、廃仏毀釈の声を聞くに及んで学を世間に求めるに至つたという。その円了が哲学を学ぶが、その哲学の真理に照して仏教を見ると、「その説大いに哲理に合するを」知つたという。そこにおいて円了は「仏教を改良してこれを開明世界の宗教となさんことを決定」したものである。それは明治十八年のことであり、「不思議研究会」を設立し、コックリ研究を開始したときでもある。

仏教の改良を企図するのは、仏教が「世人の俗事に偏するの弊あるを見、これを矯正せんとするの事情」（同書三四五頁）があるからである。しかし仏教改良の必要は単に仏教の旧弊にあるだけではない。世間は弊習も

問題であり、「仏教を日本に再興せんと欲せば、まずその弊習を改良」(同三四八頁)しなければならぬのであり、迷信退治と関わって来るのである。さらに僧侶の問題もある。「顧みてわが僧侶の内情を察するに、その過半は無学無識にして時勢を知らず、無資無産にして生計に苦しみ、その仏教を改良して開明の宗教となすあたわざるは必然の勢い」(同三五二頁)であり、「実に今日の僧侶は無資力、無精神、無学識、無道德の極に達したりと称して可」(同三五三頁)であるという。そうであるからこそ円了は、「断然仏教を改良して開明の宗教になさんことを期したのであり、それに関連して「妖怪」研究を進めるのである。

円了にとって迷信とは除去さるべきもの、合理的な説明を与えることによって解消され得る筈のものである。除去、解消され得るものは「妖怪」と呼ばれるが、なお科学的、合理的説明を以ってしても一掃し得ず「不思議」として残るものがあり、「真怪」と呼ばれ哲学の対象となるとされる。

円了は、『哲学一夕話』『哲学要領前後編』によって哲学者として名を馳せるとともに、『真理金針』によって排耶論者、また『仏教活論序論』によって仏教再興論者としても著名であったが、同時期に刊行された『妖怪玄談』『妖怪学講義』によって「お化け博士」としても著名となった。その後、円了は日本倫理学者、哲学館設立によって教育者としても著名であったが、それは何れも円了の活動範囲を示すものであった。全体として見れば円了の向ったのは啓蒙にあつたといえる。

円了が「妖怪学」に托したことは、迷信、迷誤の一掃であり、迷信の打破という社会啓蒙にある。妖怪学の体系化をなした『妖怪学講義』は哲学館の講義録として刊行された(明治二十六年〜二十七年)が、迷信打破を

広く世間に広めるのに功献するところが大であり、「国定教科書中に『迷信退治』『迷信に陥るな』の課を掲げるに至りしも亦井上先生の影響によるもの」と評価されて、天覧の榮に浴し、参百円の恩賜金を授与されたところである(明治三十年八月二十八日²⁾)。

円了が妖怪研究を始めたのは東京大学在学中の明治十七年夏であり、「其後此研究の講学上必要な理由を陳べて東京大学中に其講究所を設置せられんことを建議したることあり之と同時に同志を誘導して大学内に不思議研究会を開設³⁾したのである。その呼びかけに賛同して人会した者に、三宅雄二郎、田中館愛橘、箕作元八、吉武栄之進、坪井次郎、坪井正五郎、沢井廉、福家梅太郎、棚橋一郎、佐藤勇太郎、坪内雄蔵、の名が挙げられている。

彼らに共通する時代認識は、明治維新が未完あるいは途上にあるというものである。それを円了についてみると次のようにいわれる。「余常に以為らく吾邦明治の鴻業一半既に成りて一半未だ成らず、政治上の革新既に去りて、道德上の革新未だ来らずと、方今天下法律愈々密にして道德日に衰へ、郷曲無頼の徒名を壮士に藉り、以て良民を虐するものあり、不学不術横に時事を議し、詭譎陰険到らざるなく、居然政事家を以て任するものあり、黄口少年乳臭未だ乾かず、僅かに数卷の西籍を読み、生吞活剥、儼然学者を以て居るものあり、利を貪て厭くなきものあり、節義の風廉恥の俗蕩然地を掃ふ豈一大革新なくして可ならんや、而して之を革新するの道、教育宗教を捨て將た何れにか求めん、是れ余が宗教界に生を粟けながら身を教育海に投⁴⁾じた理由だといふのである。

日本の近代化を進めるには、何よりも教育、宗教の近代化を推進する

「第二の革命」が必要である。円了がこのことを痛感するのも世間の人々には「心中の迷雲智日の光を隠す」というところがあり、それによって生ずる迷信の除去する必要を痛感したからに他ならない。いうならば、「今日の文明は有形上器械的の進歩にして無形上精神的の発達にあらず」ということである。と、円了がいうのも、庶民はなお依然として「迷裏に彷徨」している実情があると認めるからである。

文明開化の世といわれながら、世人はな迷信、迷誤に取りこまれていく。迷信の最たるものが「妖怪」だということである。「不思議研究会」での成果をまとめたものである『妖怪玄談』⁵は、「妖怪学」研究関連書の最初であるが、それは庶民の妄信より生じる弊害が大きいので、「学術上其理を明らかにして世人の惑を聞く」ことこそ「文明の進歩上必要なる事」として、啓蒙を目的とした迷信打破のための、迷信の基礎研究を進めるものであった。迷信は、「そうでない事は信じてはいるが、理解する所以を知らぬので、『妖怪不思議の一種』」とすることから生ずるとしている。その意味からすれば、迷信は何時の世にも存在するといえる。すなわち「世の古今を問わず宇宙物心の諸象中普通の道理を以て解釈す可らざる者あり之を妖怪と云ひ或は不思議と称す」というのである。それには「数多の種類」があるが、二つに大別し得る。その一つは外界より生ずるもので、その二は内界に発するもので、内界に発するものは「他人の媒介を経て殊更に行なうものと、自己の身心の上に自然に発するもの」に区分される。これを図示すると、次のように区分される。

妖怪

外界に発するもの（第一種の例 幽霊、狐狸、天狗、大神、崇り、その他の怪異）
内界に発するもの

他人の媒介によるもの（第二種。巫覡、神下し、人相見、墨色、卜筮、祈祷、催眠等）
自己の身心の内に発するもの（第三種。夢、夜行、神知、再生、癡狂、その他の精神病）

ここにいわれる「外界」とは目前の物質世界のことであり、「内界」とは自己の身体内の心性世界のことであり、夢、夜行等は心性の変動から生じたものである。巫覡、神下し等も心性作用に直接関係するもので内界に属する。

このような妖怪の原因の解釈は時代によって異なるのは「賢愚時代によりて同じからざる」によるからである。例えば、古代にあつては、万物は各々「霊」を有し奇異の作用を現すと信じており、万物の外に一種靈妙の体が別にあると考えているが、物理の規則に照らしてその原因を明らかにし得ぬものとされる。それは「一身重我」ともいべきもので、一身に二様の我があり、その一つの我は一方に、他の我は他方に入入りして奇異の作用を生ずるのだと信じて、さらにそれ以上原因を問うことはないのだという。

しかし、人智が進むに従い、万物の外に靈妙な体を認め、媒介または感通によって奇異が生ずると解するに至っているが、物理の規則に照らしてその原因を証明するに至ってはいないとされる。しかし、今日に至っては物理化学の規則に照らして証明しなければならぬことを知り、初めて「普

通の道理」に基いて解釈を下すようになったと云われる。

二

時代によって異なる妖怪の解釈は大略三時期に区分し得ると円了はいう。

第一の時期。万物各体の内に存する他体はその原因を帰する時期である。

第二の時期。万物各体の外に存する天神にその原因を帰する時期。

第三の時期。天地自然の規則にその原因を帰する時期である。

この内、第三の時期の解釈によって定められる原因を考えると三つに分される。

第一の原因は、外界一方より起るもの、

第二の原因は、内界一方より起るもの、

第三の原因は、内外両界相合して起るもの。

第一の原因に属する例は、狐火、鬼火、蜃気楼等で、物理化学的な変化の作用によって生ずるものである。第二に属する例は、夢、癡狂、幽霊、催眠のような精神作用によって生ずるものである。第三の原因に属するものは、卜筮、予言、神知等で、外界の事情と内界の精神作用が相合して生ずるものである。世の中で「妖怪」と呼ばれるものは大抵この第三種の内外両界の相合して生ずるものに属するものである。外界一方から生ずる狐火、鬼火のようなものも精神作用がこれに加わっており奇怪さを増し、内界一方より起る夢のようなものも脳髓を組成する物質の事情によってのことであり、その他種々の外界の誘因があつて生ずるのであり、外界の事情

によるものである。

以上のように、妖怪は大抵内外両界の相合して生ずるものであるが、例えば、卜筮、予言はこの種のものである。ある人の将来を卜するに当つてその人の平素の性質、品行、学芸、名望、その一家の關係、社会の有様等の諸事情を考察すれば、おのずからその将来の吉凶禍福を卜定しなければならぬので、卜筮者又は予言者はこれらの事情を酌量してその将来を告げることになる。これが外界の事情によるものである。そして卜筮者や予言者の語ることを聞く者はそれを信ずることが深ければますますその卜定に誤りのないことを信ずるのである。これは所謂「信仰心」ともいべき内界の作用によるものである。

円了が、不思議研究会において研究調査したものを『妖怪玄談』において論じたのは「コックリ（狐狗狸、告理）」についてである。「コックリ」は明治十八年頃から民間に大流行した一種の占いであり、「吉凶禍福細大の事」に至る全てを卜筮可能と信ずる者が多く弊害が生じ、官権によって禁止されることもあつたが流行は止むことがなかつたのである。元々、「コックリ」は兒女の遊戯のようなものであつた、妻女に情人がいるとか、病人の死の日時を問うに至つては単なる遊びの域を超えて、弊害も大きくなつたので、円了は「コックリ」を迷信の最たるものとして取りあげ、世人の惑を解こうとしたのである。

先ず円了は、「コックリ」が何時頃から流行し始め、流行が広まる跡と地域、そのやり方、どのような人が信じやすいか、等の情報を各地に求め、「其始めて起りし地は豆州下田」であると推定し、それが各地に波及したと云うのである。そしてそれによれば、米国の難破船がもたらしたものとす

なわち「西洋より伝来したるもの」と論定したのである。また「コックリ」の原形は西洋の「ティブルトキング」であり、不覺作用（自動作用、反射作用）と連想、予期意向によつて説明し得ること、すなわち、「コックリ」は妖怪の一種にして道理を以て証明すべからざるものとなるか如きものに「あらす」と結論したのである。円了がここでとつた方法は多くの情報を集め、それを分析し、論理的に結論するといふものである。

しかし、世にいわれる「妖怪」の意味は莫然としており捉え難いところがあるが、人はこれを幽霊、天狗、狐狸、憑依するもの等に関連して述べ、これらは「妖怪の現象」であり、妖怪そのものの解釈については定説はない、と円了はいふ。確かに、不思議、異常、変態と解釈する者もいるが、そのとき不思議、異常とは何かがなお問われねばならぬといふのである。一般にいわれるところでは、「普通の智識にて知るへからず尋常の道理にて究むへからざるもの」を意味している。そうであるならば、普通の智識、尋常の道理とは何かの標準を定めなければならない。

しかし円了にとつて「妖怪学」を立てたのは、智識、道理によつて迷信を一掃した後に浮上する「真怪」を論ずるためである。普通の智識、尋常の道理で以つてしては、了解も究めることもできないものを「妖怪」と一般にいふが、これを不思議、不可知的と断定すればこれを研究することは最早ない。可知的とするとき更に種々の疑問も生じ、これに説明を与えようとして、研究も進められる。それが結果的には迷信、妖怪を一掃することになるといふのである。

無知、無学なる者は何を見てもその理を知らぬので事々物々は妖怪となるのだといふ。これに對して、知識人学者は、世人の知り得ぬものを知る

ので、世人が妖怪と呼ぶものも妖怪ではなくなるのである。しかし妖怪が全く存在しないといふのは学者の妄見であるともいふ。何故ならそれは一種の新らしい妄見を生み出すからである。所謂元素は何から或るか、無限の空間とは何か。これらは結局のところ人知の及ぶところではないので、「真怪」（真正の妖怪）といふべきものである。妖怪を一掃するのが科学ならば、真怪（理怪）を解明するのは哲学であり、「妖怪学」の目的とするところであるといふ。

円了によれば、真怪の名に値するのは、「自生自存独立行靈々活々の真体」であり、それを老子は「無名」、孔子は「天」、易は「太極」、釈迦は「真如」「法性」「仏」、耶蘇は「天帝」、我が国では「神」といふが、体の一面に与ふる仮名に過ぎず」といふ、円了もこれを「理想」と呼ぶが、何れも「一部分の形容」でしかない。「有限性の名を以て無限性の体を頭」わし得るのであるうか。「有限性の名称を階梯として其裏面に包有せる無限性を感知領得すること」に努めるべきである、といふ。

自然をよくよく観、よくよく察するとき、「一種高遠玄妙の感想を喚起」することがある。すなわち、理想の光景に感接したときである。このときこの世界が理想世界であることを了知した後で、再び万有を觀れば全ては理想の真景実相であることを領得し得よう。これが所謂「哲學的悟道」である。ここに於いて理想に本体と現象の別があることを知り得る。物心万有は現象であり、現象は影のように本体から離れ得ない。万有を推究して体に達するならば理想に接觸し得よう、あるいは理想の体を悟了して眼前の世界を照観するならば事々物々の内に理想を感見するはずである。理想の真相は外界に觸発されたものである。理想の本体は宇宙、外界を統轄す

る無限絶対の体であり、それがこの世界に物心として現象する。人の体は物心の二つから成るのを知るとき、物心の二者は理想の現象に他ならぬことを知るのである。この理想の世界に生まれながら一生その真相を観見しないものもある。それ故、この理を人に示すのが「妖怪」研究の目的であるが、それに先立って妖怪を一掃して真怪を明らかにするのである。

妖怪の説明は哲学の道理によるのであるが物怪の説明は理学によらなければならぬ。また人身に関わるものは医学の解釈に依らなければならぬ。ここにおいて円了は諸学科によって説明を与えようとするのである。

註

(1)『仏教活論序論』明治二十年 哲学書院 「井上円了選集第三卷」三三六頁 参照。

(2)『東洋大学五十年史』東洋大学 昭和十二年、および『学祖井上円了先生略伝・語録』京北学園 昭和二十二年 二三頁。この恩賜金を基礎として義捐金を加えて、京北尋常中学校を設立した。

(3)『妖怪学講義』一九頁。

(4)同前三頁。

(5)不思議庵井上円了著 哲学書院 明治二十年。